

## ガラスの靴

森野 水琴

着飾った乙女が宮殿に王子を訪ねてきた。

馬車から降りて、うやうやしく乙女は王子に挨拶する。

かねてより城下の乙女に逢いたいと願っていた王子は歓迎の宴を催した。

深夜十二時が近づき、乙女が焦り始めた。

門限に遅れるからと言い、乙女は走りながら宮殿を後にする。

慌てていたので、片方の靴が脱げても拾いに戻らず走つていく。

王子は走り去る乙女のうしろ姿を追いながら、残されたガラスの靴を拾つた。

やがて十二時になつた。

ガラスの靴は、みすぼらしい靴になつた。

どうやら魔法が解けたらしい。

王子は側近のひとりに、靴を届ける事が可能か尋ねた。

側近は乙女の飲み物に仕掛けしておいたので、居場所は追跡できると答え、

王子から靴を預かつた。

王子は魔法使いである側近は、乙女の飲み物が示す居場所をつきとめ、馬車を走らせ急行した。

乙女は家に届けられたものの、靴の片方が無く、戸惑っていた。

側近は乙女に靴を渡すと、王子からの伝言があると言い、乙女と一緒に家に入つた。

王子からの伝言とは、乙女が一年間王子の側で仕えるようにとのことであつた。

驚く乙女の両親と姉たちに、一年間乙女を借りるためと側近は金品を渡した。

王子からの命令とあれば乙女に異存は無かつた。家族に別れを告げ、側近とともに乙女は宮殿に向かつた。

王子は喜んで乙女を迎へ、宮殿での作法等を一年間で身に付けるよう乙女に言つた。

以来、王子に仕えることは毎年更新され、ついに乙女は王子に嫁いだ。